様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　6 月　23 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007 年度～2008 年度
課題番号：19720102
研究課題名（和文）　叙述の類型から見た状態文とその統語構造の類型的研究

研究課題名（英文）　Typological study on description types and syntactic structures of stative sentences

研究代表者
眞野　美穂（MANO MIHO）
関西看護医療大学・看護学部・講師
研究者番号：10419484

研究成果の概要：状態文の統語構造の通言語的な解明を目指し、叙述の類型という観点から日韓英語の分析を行った。その結果、各言語において状態文は一律の性質を持つわけではなく、叙述の類型つまり文の意味機能により様々な統語現象での差異が観察されることが明らかになった。状態文の統語的特性は述語の意味だけではなく、生じる構文の機能の違いにより決定されること、また状態文と出来事文の関係についても類型的な観点から新たな知見を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,100,000	360,000	2,460,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：状態文、叙述の類型、状態・属性、統語構造、時間性

１．研究開始当初の背景

(1) 国内外における状態文研究の遅れ

国内における状態文の統語構造研究の遅れやその研究課題の偏りは、日本国内で発表された研究文献の整理と研究動向を調査した研究（益岡 2005）からも明らかである。形容詞や名詞述語文の分類やその特性を探るものや主題との関連から論じた研究は多いものの、非状態文と対比を行う研究や、状態述語を取る構文自体の機能と統語構造を探る研究などはまだ少ない。

海外においても、特に印欧語の研究では他動詞文などの形式化された構文が研究の中心となってきたことや、主題を表す明示的な標識が存在しないことも要因となり、状態文の研究は出来事文と比較し、遅れていると考えられる。

そのような中で状態文を類型的視点からとらえた研究も、不足していると言える。状態文の中には通言語的にも所有文や存在文のような重要な構文が含まれており、文の構造と意味のかかわりの究明のためには、出来事文だけではなく状態文の解明が不可欠であると考えられる。

(2)叙述の類型による他言語分析の可能性

研究計画者は、眞野(2005a, b)で、叙述の類型のシフトが状態文である与格主語構文における項の減少を引き起こしていることを指摘した。その中で、益岡隆志氏が一連の研究の中で日本語文法の研究の成果を踏まえた形で提案してきた「叙述の類型」という概念が、より多様な言語現象、さらに他言語の統語現象の分析にも有効な概念であることが予見された。

また、Kageyama(2006)は、日英対照でヴォイス現象を叙述の類型の観点から論じた先駆的な研究であるが、その中で両言語のヴォイスとそれに関わる項の減少現象に、叙述の類型が重要な役割を果たしていることが示されている。さらにKim&Sells(2006)が韓国語の副詞句の格標識の選択に文の意味（ここでの叙述の類型）が影響していることを主張していることからも「叙述の類型」という概念の他言語分析への応用可能性が示唆される。

このような背景の中で、本研究の着想が得られることとなった。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の二点である。

(1) 状態文の統語構造と意味機能のかかわりを明らかにすること

第一点目として、本研究は物事の状態や属性を述べる状態的な文（状態文）の統語構造と意味機能の関係を解明することを目指す。1.(1)で述べたように、これまでの統語研究では展開のある事象を表す文（出来事文／非状態文）が中心課題となってきた。その一方で、状態文に関してはあまりさかんに研究がされてこなかった。その理由の一つに、状態文では出来事文で観察されるような多様な格フレームや項構造、格の交替現象、ヴォイス現象などが観察されにくいことがあげられる。このような形態統語的な手がかりの少ない状態文であるが、文の構造と意味のかかわりの究明のためにはその分析は不可欠である。そのため、本研究では状態文の統語構造と意味機能の解明を目指す。

(2)「叙述の類型」の通言語的検証

第二点目として、「叙述の類型」という概念が通言語的な言語分析に有効な概念であることの検証を目指す。また、「叙述の類型」という概念により、先に(1)で述べた形態統語的手がかりの少ない状態文の特性の解明につなげる。

「叙述の類型」は、佐久間の「物語文」・「品定め文」という種別に始まる日本語文法の研究成果を受け継ぎ、文をその叙述する内容により、「事象叙述」と「属性叙述」の二種に分ける（益岡 2008 他)。「事象叙述」は特定の時空間に実現する事象を、「属性叙述」は対象の有する属性を述べるものである。この叙述の類型が日本語の様々な統語現象を説明しうるものであることが益岡氏の一連の研究の中で検証されてきた。

本研究では 1.(2)であげたように日本語文法研究で得られたこの「叙述の類型」という概念が通言語的にも有効な概念であることを、類型論的な手法を用い、状態文の分析を通して明らかにしたい。そしてこれにより、これまで研究の遅れていた状態文の構造の解明にもつなげたいと考える。

３．研究の方法

本研究では、具体的には日本語・英語・韓国語を対象とし、機能主義的類型論の手法により、様々な状態文（状態動詞・形容詞・名詞などの状態述語を取る文を中心として）の統語的分析を行う。

これまで行った研究で得られたデータや先行研究の知見に加え、母語話者への調査（各言語の母語話者からの聞き取りや記述式調査）を行い、さらにコーパスデータ（WB, BNC 等）を使用することで、状態文の統語構造と意味機能、そして述語の意味特性がどのような関係にあるかを究明する。また、その際に文の叙述の類型がどのようにその統語構造に影響を与えているかを探る。

そして、個別言語における研究で明らかになった事実を、類型的な手法により他の言語での事実と対照することで、言語構造の果たす機能の共通性を明らかにし、状態文の統語構造に関してさらなる一般化を目指す。

４．研究成果

本研究の主な成果は以下の三点である。

(1) 先行研究における類似概念の比較・整理と課題の提示

本研究では、研究の第一段階として、「叙述の類型」に関連する先行研究をまとめ、その問題点を明らかにした（眞野 2008b として発表)。

「叙述の類型」は益岡氏がこれまでの日本語文法の研究成果を踏まえた上で提案したものであるが、類似の概念は他言語の研究の中でも観察される。言語間の違いを前提としても、文の行う叙述とその意味機能という叙述の類型と共通する視点から統語現象をとらえようとする研究は国内外で行われてきたからだ。

しかし、それぞれの研究の関連性や相違点について、これまでほとんど検討されてはこなかった。用語の違いにより、各研究の関連性が不明確になり、そのことが研究の発展の妨げになっていることも否めない。類似の概念を整理し、その相違点と問題点を明らかに

することは、今後の言語研究に大きく貢献できるものであると考え、比較・整理を行った。以下に関連概念と相違点、そして課題をまとめる。

①個体レベル・事象レベル・種レベル叙述

関連する研究の一つに、Carlson(1977)に始まる「個体レベル(individual level)」・「場面レベル(stage level)」・「種レベル(kind level)」という叙述の区別に関する研究がある。属性叙述に相当し、個体の内在的で永続的な性質を述べる「個体レベル」の叙述、事象叙述に相当し、個体の一時的な状態や行為などの場面を叙述する「場面レベル」の叙述、種に関する叙述する「種レベル」の叙述は、その叙述内容によって区別される。英語の名詞句の解釈や、スペイン語の２種のコピュラ動詞の選択など様々な統語現象にこれらの違いが影響を与えることが先行研究で指摘されている。

「叙述の類型」の概念と非常に共通性が高いと考えられるが、「種レベル」を「個体レベル」の叙述と区別する点が、それを属性叙述の一種とする「叙述の類型」と異なる。

②事象項(event argument)

もう一つが、述語のアスペクト特性や時間的持続性に焦点を当て、それが行う叙述の傾向を見た研究である。Davidson の提案する「事象項」とは、事象を叙述する述語が持つ項であり、それは時空間を表す項と関連付けられる。Kratzer(1995)は①にあげた Carlson の研究と関連付け、場面レベル述語は事象項を取る述語であり、それが外項として実現し、個体述語は事象項を持たない述語だと指摘しているが、すべての述語が事象項を取るという立場も存在するため注意が必要である。

「事象項」の概念は、(2)で後述する「時間軸の関与」という概念を通し、「叙述の類型」の概念と関わっており、その応用範囲の広さからも重要な概念である。

③その他

文レベルの叙述内容に着目した研究として、総称文に関する研究もあげられる。総称文は属性叙述のみを行う構文であるため、出来事動詞を述語に取っていたとしても、他の出来事文とは異なる統語的振舞いを見せる。

また、述語のアスペクト特性や時間的持続性に焦点を当てた研究も叙述の類型に関連する場合がある。品詞と叙述類型の関係が示唆されるからである。

このように「叙述の類型」に類似する関連概念が、様々な言語の様々な言語現象に対する研究で観察されること、そしてそれらの関連性を明らかにした。また、何に着目するかによって概念の相違点も存在することを示した。Kageyama(2006)の研究成果を含め、日本語の文法研究の中で提案された「叙述の類型」が様々な言語分析へ応用可能性を持つ概念であることが示唆された。

また各関連概念に共通する課題として、叙述類型などの文の意味機能の違いを客観的に示すことのできる言語現象を明確に示すことが望まれる。それは特に形態統語的多様性の少ない状態文において重要であり、課題である。以下では、その課題に取り組んだ研究成果を報告する。

(2) 状態文の統語的特性と意味機能の関係

(1)の成果を受け、本研究の中心課題である状態文の統語構造と意味機能の関係を探るために、日韓英語の状態文について、特に状態文内での差異に着目し分析を行った（眞野 2008, 眞野・影山 2009として一部を発表）。

特に(1)で指摘したように、各関連概念に共通する課題として、文の意味機能の違いを客観的に示すことのできる言語現象を明確に示す必要があるため、本研究ではいくつかの言語現象を検証した。

① 状態文の特性と種類

状態文とは時間に沿った展開や変化のない状態や属性を表す静的な文であり、時間と共に展開する動作や出来事を描く動的な出来事文とは異なる性質を持つ。状態文と出来事文を区別するための日韓英語で共通した統語的特性としては以下のものがあげられる。

<u>状態文の特性</u>

・出来事の生起を聞く文の答えになれない。
・単純現在時制で使われると、現時点で実際に成立している状況を表す。

しかし状態文は一律の性質を持つわけではなく、一時的状態を表すか、長く持続する対象の属性を表すかで、統語現象において差異が観察される。「状態」はある特定の時間軸上に位置づけられる対象の状態を述べるといった事象叙述であるのに対して、「属性」は時間軸に関係なく対象の持つ特徴を述べる属性叙述であることが関与している。つまり、状態文の叙述する内容に時間軸が関与するかどうかによる違いである。本研究ではこの違いを示す現象として、特定の時間を表す副詞との共起現象などいくつかを提示した。

文の種類と叙述の類型との関係を（表１）にまとめる。

（表１）文の種類と叙述の種類

	叙述の類型		
	事象叙述		属性叙述
	出来事	状態	属性
時間軸の関与	○	○	×
時間による展開	○	×	×
文の種類	出来事文	状態文	

② 状態文の叙述の類型と構文

状態文は、時間軸の関与する事象叙述を行う「状態」と、時間軸の関与しない属性叙述を行う「属性」に分けられるのであるが、状態述語は、基本的にどちらかの叙述を行う傾向がある。しかし、中には二通りの叙述を行うものも存在する。

また状態文の叙述の類型は、どのような構文として表されるかによっても決定される。そのような構文や統語現象は言語間で相違はあるものの、類似している。以下にその構文の一部と特徴をまとめる。

まず、進行を表す形式（英語 be -ing形、日本語 テイル形、韓国語 -hako issta形）は進行を含め、時間軸の関与した叙述を行う。そのため、通常属性叙述を行う形容詞述語を取っているにも関わらず、(ｉ)はすべて事象叙述を行っている（※以下例文はローマ数字で示す）。

(ｉ)a. John is being polite.
b. 健はおとなしくしている。
c. ku-nun onul cemcanhkye hako issta.
（彼は今日おとなしくしている。）

これらは文に「ある状況がそのうちに終わる」という終了の時間枠をはめる働きを持ち、意図性の意味を誘発ないし強制するという特徴がある。そのため、状態に活動や変化の意味が加わり、事象叙述を行うことになる。このような意味が可能な述語には、人間の性格や態度を表すものが多い。

(ⅱ) polite, noisy, careful, quiet, etc.
（日韓語でも類似）

ただし、日本語・韓国語では形容詞を上記の形式にする場合、「する/hata」という意図性の動詞が必要な点で英語とは異なっている。

一方、総称文（例：日本語 -ものだ、韓国語 -pepita等）は述語の状態性に関わらず属性叙述を行う、時間軸が関与しない構文である。そのため(ⅲb)のように一時点を指す時間副詞とは共起できない。

(ⅲ)a. 猫というものはよく寝るものだ。
b. *猫というものは今日よく寝るものだ。

総称文は、時間軸の関与をなくし、対象に備わった属性を述べる構文と言える。似た機能つまり文の叙述類型を事象叙述から属性叙述に変更すると考えられる構文には、中間構文や属性叙述受身文などもあげられる。

③状態文の構造

このように状態文の中でも差異が観察されること、そしてその状態文の叙述の類型により文の構造に差異が生じることが分かった。

状態文の構造をまとめると、通常状態文は展開のない状態・属性を表すため、その述語は変化の意味を欠くものでなければならないため、一般的な状態述語の意味構造は＜yがzの状態にある＞というものになる。yは内項であり、これが状態文の主語として生じることになる。ただし、次に(3)で分析を行う与格主語構文は、これとは異なる統語構造を取る非規範的な状態文である。

このように出来事文と状態文の違いや状態文内部での差異を、その違いが確認できる現象と共に示すことは、これまで遅れていた状態文の構造の解明への一歩だと考える。そして、これらの研究成果はその他の構文研究への発展可能性も示唆している。

(3) 状態文から出来事文への構文の拡張

三点目として、状態文から出来事文への構文の拡張について分析し、状態文と出来事文の関係とそれに影響を与える要因を考察した。

非規範的な格フレームを取り、状態的な文に偏ると考えられていた与格主語構文に出来事文へ拡張している部分があること、そしてその広がりには「所有」の概念が深く関係することを明らかにし、状態文と出来事文の境界における統語現象の仕組みを示した（眞野 2008a, 眞野 to appear として一部を発表）。

①与格主語構文の特徴とその広がり

通常状態述語は、主格名詞句一項のみを必須項として要求するのであるが、日本語の与格主語構文は「ニ（与格）―ガ（主格）」の二項を必須項として取る状態文であり、与格名詞句が文法上の主語として振る舞う点で、非規範的な構文である。これまで与格主語構文の研究の中心となってきたのは状態文で構文として安定している(ⅳ)のような与格主語構文であった。

(ⅳ) 健に子供が二人いる（こと）

しかし、あまり着目されてこなかったものの、(ｖ)のような動的な（非状態的）与格主語構文も存在する。

(ｖ) 健に子どもができる。

(ｖ)はル形で未来の解釈となるため非状態的

な事象を表す(⇔(ⅳ)現在)。その一方で(ⅵa, b)より、与格名詞句が尊敬語化の対象となること、再帰代名詞を支配することから与格名詞句が主語として振る舞う構文であると考えられる。

(ⅵ)a. 先生に子どもがお生まれになった(こと)
b. 健に子供が自分の誕生日に生まれた(こと)

つまり(ⅴ)は、「非状態的与格主語構文」と言える。

②非状態的与格主語構文の特性と制約

先行研究は少ないものの、非状態的与格主語構文は「できる」「生まれる」など出現・発生の意味を表す限られた動詞において確認されることが指摘されてきた。そして、本研究の調査の結果、それ以外にも以下のような場合で与格主語構文が観察されることが分かった。

非状態的与格主語構文の範囲

- 状態的与格主語構文に生じる状態述語が状態的な意味を表す場合
  (ⅶ) 先生に明日会議がおありになること
- 所有関係の未発生または所有関係の喪失を表す場合
  (ⅷ) 先生に忍耐力がなくなられたこと
- その他所有関係の発生の意味を表す場合
  ※話者による許容度の差あり
  (ⅸ)a. 先生に先週ボーナスがお入りになったそうだ。
  b. 先生には宝くじがお当たりになったそうだ。

これらの非状態的与格主語構文は、「制御不可能」で「非意図的」な事態を表すという特徴を持っている。これは状態的与格主語構文と共通する特徴である。これは動作主(agent)を取らないということでもあり、述語はすべて自発的な意味を持つ非対格動詞、つまり外項を取らないことも分かった。これは一項のみを取る状態述語とも共通する。

しかし、これらの述語はいつも与格主語構文として生じるわけではない。「与格名詞句に所有者として解釈可能な有情者を取り、主格名詞句に所有関係が想定される事物を取り、文全体で所有関係の発生・喪失を表す場合」という意味的な制約が存在する。さらに、これらの構文は名詞句間に所有関係(所有者―所有物)が成立する外部所有者構文としてとらえられることを提案し、他の外部所有者構文との共通点と差異を示した。

それに加え述語部に語彙的な制約が存在することも明らかにした。

③与格主語構文の概念構造と拡張

非状態的与格主語構文の表す事象は、動的とはいえ、典型的な他動詞文が表すような働きかけの事象を表すものではない。非状態的与格主語構文は、状態的非規範的構文が示していたような概念構造(その中でも特に「所有関係」)が出現・発生する、もしくはそれを喪失することを表す、という特徴を持っていた。つまり、意味構造としては<変化→結果状態>の部分のみを表し、状態的与格主語構文の表す<状態(二項間の所有関係)>が出現・発生・喪失する(変化)ことを表す文と言える。この点で非状態的与格主語構文は、状態的与格主語構文の概念構造を含んでいると考えられる。そのため、非状態的な与格主語構文への拡張が生じたと考えられる。しかし、出現・発生という時間軸上の展開を表し<変化>の意味を持つことから、出来事文であることを指摘した。

(4) まとめと今後の展望

本研究では、これまで研究の遅れていた状態文の統語構造とそれに関わる意味機能について、そして出来事文との関係についても、類型的な観点から新たな知見が得られた。

文の意味機能についての関連概念の共通点と差異を明らかにし、状態文の叙述類型による異なる統語的振舞い、そしてその差異を示す統語現象を提示することで、今後国内外において形態統語論的手がかりの少ない状態文に対し、より広い範囲でのより分析的な研究へとつなげられると考える。

また、状態文から出来事文に拡張が見られる与格主語構文の分析により、統語構造の決定に意味機能が大きな影響を及ぼす事例を示すことができた。

今回の研究成果を受け、今後以下のような展開が考えられる。

- 今回の研究で明らかになった状態文における統語的差異の理論的分析と検証
- 状態文と出来事文にまたがって存在する他の構文の研究
- 叙述類型の他言語研究への更なる応用

今後さらに状態文研究が発展し、日本語からの発信と言う形で、出来事文を含めた文の構造と意味機能のかかわりの究明がより一層進むことが期待される。

（引用文献）
Carlson, Gregory, *Reference to Kinds in English*, 1977, Ph.D. dissertation, U. Mass.
Kageyama, Taro, Property description as a voice phenomenon, Tsunoda & Kageyama eds. *Voice and Grammatical Relations*, pp.85-114, 2006, John Benjamins Publishing Company.
Kim, Jong-Bok & Peter Sells, On the role of animacy and the participants in the eventuality in case assignment in Korean, The 16th J/K Linguistics Conference, 2006, Kyoto University.
Kratzer, Angelika, Stage-level and individual-level predicates, Carlson & Pelletier eds. *The Generic Book,* pp.125-175, 1995, The University of Chicago Press.
眞野美穂、状態述語文の時間性と叙述の類型、2005a、日本文法学会第６回大会.
Mano, Miho, *Functional Typological Study on Non-canonical Constructions*, 2005b, Ph.D. dissertation, Kobe University.
益岡隆志（編）『日本語と諸言語の対照研究』2005、神戸市外国語大学外国学研究所.
益岡隆志（編）『叙述類型論』2008、くろしお出版.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 眞野美穂、状態文の時間性と叙述の類型、益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.67-92、2008a、査読なし.
② 眞野美穂、叙述類型研究史（海外編）、益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.193-220、2008b、査読なし.
③ 眞野美穂、与格主語構文の広がりと他動性、岸本秀樹（編）『ことばの対照』、to appear（掲載決定済）、査読あり.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

① 眞野美穂・影山太郎、第二章 状態と属性―形容詞類の働き、2009、（影山太郎（編）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』の「第二章 状態と属性―形容詞類の働き」pp.43-75 を担当）.

６．研究組織

(1)研究代表者

眞野　美穂（MANO Miho）
関西看護医療大学・看護学部・講師
研究者番号：10419484

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし